贋・久坂葉子伝

富士正晴

れもん　れもん
れもんのにおいは
静止した影のように
けだかいから
過去に罪を背負された
女の歎きを
知っている。

冬樹社

贋・久坂葉子伝

富士正晴

冬樹社

贋・久坂葉子伝

昭和五十四年三月二十三日　新装版第一刷発行

著　者　富士正晴
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町三―二七―六
郵便番号　一〇一
電話　東京　二六四―〇三四六（代表）
印刷　三容堂印刷株式会社
製本　株式会社美成社

© 1979 MASAHARU-FUJI
0093-10304-5190

贋・久坂葉子伝　目次

序　章　そうはゆかない！　3
第一章　木ノ花咲哉・一九五三年元旦の死亡通知　6
第二章　久坂葉子・結婚契約書　41
第三章　木ノ花咲哉・一九五三年一月中旬　86
第四章　久坂葉子・一夜の宿　130
第五章　木ノ花咲哉・繰上げ法事　186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第六章　久坂葉子・罪ある女　214
第七章　木ノ花咲哉・ラヴレター　263
第八章　久坂葉子・彼女は久坂葉子とちがいますよ　274
第九章　木ノ花咲哉・去るものは日々に疎し　320
第十章　久坂葉子・一九五二年の終り　325
あとがき　367

贋・久坂葉子伝

L'eternel cyprés m'environne:
Plus pâle que le pâle automne
Je m'incline vers le tombeau.
(EVARISTE GALOIS)

久遠なる糸杉はわれを囲む
色あせし秋よりもなお色あせて
わが身は墓へとくだりゆく
(エヴァリスト ガロア)

*糸杉は喪の象徴・棺ををつくるに用いる

序章　そうはゆかない！

私はボビちやんをただの女の子として好きだつたんです。彼女の作品をよんだ訳でもなく読みたくもなし、只人の批評で「ハハア、年の割に才能があつたのだナ」と思うより仕方なしです。どんなにうまかつたのかも知りませんし、それは私の気持に全然関係なし。亡くなつた事でも私にしてみたら、ボビちやんから聞いた少々のけいけんから考えて「面白くなかつたから色々うつうつ考えていやになつて終つたナ」と思うだけです。作品や書く事が原因なら私は何も言えません。ボビちやんが面白くなかつた気持が私が味つた面白くない事に共通してたので、私は私なりに彼女の心中を察してました。

くどいようですが、これは私だけの考え。私はボビちやんは女として苦しんだと思います。

本当の気持はボビちやんと神様だけしか知らない筈です。

どんなに自分以外の者を理解しても完全にわかりますまい。（私の考えです）

案外誰かの考えが当つてるかもしれません。オノレを知るものオノレにしかず、99％まで人にうちあけてもあとは皆残つているでしよう。ナムアミダブツ（今井和子　昭和二十八年一月十一日夜）

久坂葉子は死んだと新聞は伝えた。六甲駅で最終の電車に轢かれて死んだ。これは過失死であろうか、自殺であろうか。新聞の上では断定はしていなかつた。彼女の持物の中には、遺書らしいものもなかつたし、彼女の数日前からの態度もいつもと同じようであつたという。

Aは言つた。

「自殺だ。彼女は精神的に何かがかけていたようだ。だから電車の轟音をきいた時、ふと、死んでやれ、よかろう、ということになつたんだろう」

Bはつぶやいた。

「かわいそうに、俺に結婚をことわられたもんだから……しかし、死ななくてもいいのに、だが、あんな女房を背負いこんだひにや殺されたかも知れん、何をやらかすかわからんからね」

Cは笑つて言つた。

「過失死だよ。あれは中々慾がふかかつた。だから、何か持物を線路に落した。電車につぶされないうちに取ろうと思つて、走り出したところをひかれたんだ」

Dはさみしそうに

「彼女が死んだという事実はもう堪らない。自殺であるにしろないにしろ、自分の命を失つたようだ」

Eは、

「ゆきづまりを克服出来なかつたんだ。誰でも一度経験する行きづまりをね」

一週間たつた。もう誰一人彼女のことをいう者はいなかつた。小さい命は誰の頭にものこらなかつた。（久坂葉子）

わたしのクイン・エリザベス。そうはうまく行かなかつたじやないか。それは最終の電車ではなかつた。お前は知り合いの若い女にホームで話しかけられそうになるとは予定していなかつた。お前の眼に涙があつたとその若い女は後で言つたがそれはどうであつても良いことだ。お前は誰に向つてか、多分世界に向つてだろう、手袋をはめた手をひらひらと振り、それから誰が見ても明かな身振りで、吸いこまれるように急行電車の前へ、飛び下りた。なるほど六甲駅でだ。そして遺書らしいものも持たず。だが、いや、数日前からの態度の巧みさにはデリケートなところがないではなかつた。わたしがまんまと引つ掛つたのだから。A、B、C、D、Eの解釈はまあ良いとしておこう。けれど、二年近くになる今も、お前が実はひそかに望んでいたように小さな命は人の頭に残つている。お前が死んでの後の他人の解釈まで考えるとはありそうなことだ。人間は死んでの後までも生きたい。殊に、自分の葬式を眺めてみたい欲望は、虚栄心に富んだわれわれ一人のこらず持つているものだろう。それも、どうでもよい。どうでもよい

が、わたしの或るきつかけにはなる。だから、わたしはお前の似せ伝記を、自殺の次の日から始めることにしよう。

（VIKING満七年の年　一九五四年十月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　木ノ花咲哉・一九五三年元旦の死亡通知

いつの年でも元旦はわたしには重苦しい。年の暮の疲れがそのまま残つているし、酒を人と飲まねばならないからだ。しきたりとして、わたしの家では正月の用意のために、大晦日の夕刻、あひるを二、三羽殺して料理する。戦場でわたしは鶏をしめ、あひるをしめ、鴛鴦をしめ、豚を叩き殺し、牛をつき殺した。だから、正月のためのあひるを殺すことは、まことに当然のようにわたしの役割とされてしまう。わたしはあひるを不意にとらえ、先ず左手でその目をふさいで、庭石の上に首をのせて庖丁で一気に切り落す。鶏のように首をひねるだけでは水鳥は死なない。あひるは尻でも呼吸するから首をしめても駄目だと人は言うがそれは信じない。しかし、人がそう言いたくなるような息の長さ、生命の強さはたしかにあるのだ。わたしはあひるを殺しながら陰鬱になり、がつくり疲労する。そして不機嫌になつてしまう。そのために、あらかじめ焼酎が買われている。だから、わたしの年末から年頭への二年越しの酔いは焼酎の酔いなのである。ぶんなぐられた鈍痛のように根をひく酔い、愚鈍な何かわずらわしい酔い。そして二年越しの疲労。首を切られたあひるがぐいぐい暖かい身動きをしながら、切り口からどどどと流す血の鮮やかな色、そのほかに生臭い匂いを嗅ぎながら、年々歳々、血の色は重くなり、血の匂いは金気臭さが深まることを感じる。わたしはあひるの羽ばたきをおさえつつ、切り口からぬうつと突き出してくる背骨を眺め、そして血が砂の上をねつとりと染め、空気にあたつて固まつて行くのを見る。しかし今年はとりわけそれが血生臭いという感じで来た。わたしの中に眠つている何に向つても知れぬ殺意がふいに鋭く耳を立てようとしているような気配。わたしはあひるを逆

釣りに柿の枝にぶらさげると、手を洗つて、その生臭い手でコップをとつた。自分の室に帰り、わたしは何か周囲が薄暗くなるような気持で、焼酎をあふつた。急激に来る酔いの中で床をしき、寝る。正月の準備をやつている家人の動きがやがてひどく間遠く感じられてくるのだ。仕方ないよ、お前たちは食われるために飼われていたのだから。人間様だつて、もつと、むごくあつかわれているのが沢山いたのだし、今もいるのだ。何一つ世話してもらえず、そして、しばられたり、いじめられたり殺されたり、むごくむごく……

……わたしは蒲団の中で目をさました。うす闇が広く涯もなく感じられ、そこに久坂葉子がやつて来ているのだつた。彼女はトッパーとズボンという恰好で、ひどく小さく見える。ぼんやりと眺めていると、彼女はずかずかとわたしの蒲団の中へ踏みこんで、わたしの傍に横たわつた。「ねえ、わたし来たのよ」「こんな時にどうしたんだい」「うふふ」彼女は笑うとわたしの体にからみついて来た。「よせよ、おれ困るよ」彼女は黙つたまま、まつわりつくのを止めない。何か容易ならぬことが起るという感じがした。わたしは自分の疲れが想像を越えて重いと思つた。「よせ、よせ。それは余り感心せんぜ。困るなあ、お前さんは」彼女はひどく真剣だつた。だが、彼女が真剣にしようとしている事柄はわたしには困る事柄である。彼女は闇の中で小さかつた。そして、わたしも小さく見えるのだつた。蒲団も小さかつた。闇すらが小さくて、寒々と真暗だつた。彼女が真剣に行おうとしていることも、彼女の気持ばかりは鮮かに判つても、わたしにはなにかその動作が遠い遙かなものに思える。彼女がどうしてそう真剣なのか、ぼんやり不思議であつた。「かなんやつちやなあ、君は」そして、彼女は目的を果した。彼女はわたしを自分の物にしてしまつたわけであつた。わたしの体はそれに確かに応じた。そして、それはそれだけの夢であつたのだ。年越しそばを食べるようにわたしを起している声が夢からわたしをぐいとひつぺがした。除夜の鐘がラジオからも、近くの寺寺からも聞えていた。割り切れぬ気持でわたしはそばを食べた。あひるの骨をとろ火で煮ている匂いがしていた。あの濃く赤くぽたぽたと落ちたあひるの血のことと、久坂がわたしと無理に交つた夢とが、わたしの曲げた背の上にのしかかつているような感じがした。疲れているから変なことを考える、とわたしは思つた。いやな年がすめば、又い

やな年がくるだけのことだ。思つてみれば、物心ついてから日本は悪くなつて行くばかりのようだ。今年も大変にきまつている。わたしは再び床へ帰つた。パンツを汚していないのはやはり年というものだつた。それは夢の中の彼女に対して良いことなのか悪いことなのか、と今になつて考える。しかし、その時は、ただ、眠りの中に墜落するだけのことだつた。やあれ、やれ！　そう最後に思つたと思う。

いやな気持で早くから目がさめた。いつもの汚れた兵隊ズボンにジャンパーでもそつとして茶の間に出て行つた。こもつている炊事の匂い。正月着物に改めて、神棚のお供物を整えている父、台所でことことやつている母や妻。いつも年の始めのためしは睡眠不足だ。そしてラジオはお目出度うだ。鶏の声に鶯の声に、長唄に、うたいに、漫才に。ラジオは雑音まじりで鳴つていた。あひるの血に、性交か、わたしは自嘲した。おれはお正月は嫌いだ。神棚は拝まず、服を改めず、つまりおれは、子供の時から一日でふつと世の中を変らせるこの技術にどうにもそぐわなかつたのだ。けれど、おれは無神論者で、晴の着物や晴の洋服をもたない貧乏人だから、素直にこうなのだから良いのだろう。おれの女房や二人の子供はどうなるんだ。いや、年末に一家心中するよりは未だしもましというべきだ。わたしは年末正月にやたらにつまらぬ金のいることに気を悪くしていた。訪問し合い、酒をのみ、子供にお年玉をやり、しきりに目出度がり、晴々として——しかも、楽屋裏ではひやひやと、まず酒代の心配というわけである。おれのところも二級酒というところだろう。そしておれは、御相手するためのおれ用の焼酎など買い込んでいるのだから、浅ましいといえば浅ましく、しみつたれているといえばしみつたれている。それはおれが哀れにも貧乏だからだが、その貧乏のおつき合いを女房子供にさせねばならないということは、何とも苦痛な思いを、正月からおれにさせる。

「おい、変な夢みたぜ。久坂のやつがな、来やがつてな、蒲団の中へ入つて来て……」「のんきなこと言つて！」忙しく立ち働いている女房はてんから取り合わなかつた。父は年始の挨拶にゆき、わたしは誰も来なければ良いがと、室の中にねころんでいる。おれはスェーターが一枚ほしい。とつくりになつているスェーターはおれのあこがれなのだ。そのようなことを考えながらねころんでいる。久坂が来るのならよいな。しかし、あいつ正月は遊び廻ることが

あつて忙しくて、こちらへは来れまい。大晦日を無事にこして、新年となれば、クイン・エリザベスも気が変つているだろう。気が変つてくれればいいな。自殺の話ばかり聞かされているのはいい加減なことだ。そのようなことを思いそうだが、久坂のことは何一つ思わなかつたと思う。わたしは又、うたたねした。

電報が着いた時、わたしは三人の客の相手をしていた。義理の従弟がしきりと喋つていたのだが、話題は正月向と言い兼ね、語り口の重苦しい熱つぽさは従弟の意志を無視して、もつと内らの方のものが強いて喋らせているという風に見られた。彼は朝鮮、満州を股にかけての憲兵生活を、そうだ、それは告白とか、ザンゲとか言つた方が良い語り口で話しつづけた。そして、若い無名の小説家とその妻である和服姿の晴着の詩人と、わたしとはその話を殆んど黙つて聞いていた。それは残酷な事件の積み重ねであり、従弟の手を下した事件であつた。そしてそれの残酷さを露骨に話すことによつて、従弟は自らを何とか解放しようと焦つているようであつた。聞き手のわたしたちはあのお伽話の木の洞のようなものであつた。遂にはふきこまれた話の重さに耐えかねて叫び出したというあの木の洞であつたのだ。重苦しく彼らは二級酒をくみかわしながら、わたしは貧乏たらしい焼酎をあふりながら話はつづけられていた。二級酒は琉球の徳利に、焼酎は久坂葉子がわたしにくれた鹿児島の黒物と呼ばれるカン徳利に入つていた。カン徳利はもらつてから幾日もたつていないのであつた。わたしの晩酌用よと彼女は言つたのだ。わたしたちは丸で重苦しさを濃くするためのように酒をのみ、焼酎をのんでいたのだ。脳の中にまで肉体的な重苦しさが充ちてくるようだつた。変な元日だなあ、おれたちは何ちゆう話をしているんだ。わたしが言うと皆は短く笑つた。そしてその時、電報――という声がしたのだ。

クサカシスオイデ　コウタムラ　ふうん、それで昨日の晩来やがつたて訳か。こんどは分量うまくやつたな。

「おい、久坂が自殺しよつた」と、わたしは妻に言つた。シスは動作であつた、状態ではなかつた。そうとしかわたしは取らなかつた。

「すぐ服を出せ。神戸へ行く」

座の者たちは声を出さなかつた。「変な話ばかり正月早早に出ると思つたよ」わたしは三人を見下しながら笑つて、兵隊ズボンのひもをときながらどすどすと自分の室に

歩いて行つた。

空は曇つていた。真つ直ぐな砂利道はいやに白つぽかつた。そしてうごかぬ空気は畑をつつみ竹藪をつつんで、いやにのんびりと閑散だつた。その一里半の道を、わたしと三人の客は阪急電車の停留所へと歩いて行つた。長々としたその道。どうしてわたしはこうせかせかと歩くのか。事は終つたというのに。せかせか急がねばならなかつたのはこれより前にだ。おれにカン徳利と灰皿を嬉し気にくれ、おれが素直に受けとつてくれたと言つて手を打つて喜んだ時の彼女。そんなものはいらんと田村が断つたと語つた彼女。あの時も、わたしの頭は酒でどんよりと暗く、ひとところにじつとしておられないような状態だつた。体が厭世的であつた。というのは体が疲れに耐えられなくて、一挙に疲れをふり落したかつたのだ。だが、疲れは体にくつついているしらみや蛔虫ではなくて、体そのものなのだ。だから一挙に疲れをふり落すとは一挙に体をふり落すことでしかない。ここでは自殺しか方法はあるまい。酒—心臓の疲れ—不安—酒、そうして、その場に何とか生命めいた雰囲気を持ちこもうとしての色事すらも、結局は心臓を疲れさせるのが落ちであろう。そうして太宰治も死に、田中英光も死んだ。彼らの思想のために死んだというよりは、もつと肉体にからんだ直接的なもつれを一挙に捨て去るために死んだ。結局は酒が殺す。久坂葉子も又、酒をのみすぎたのだ。そして彼女も又、太宰や田中英光のように、酒の考えさせ感じさす事を、自分の思想と受けとつたのであろう。何と、それは観念的なことだ。デカルト以前だ。だが、やはり、彼等は哀れで、よし死なず生きても、哀れなこと、生きているわれわれと同然ではないか。何か蒼ざめた、そして人生の目出度い休日の気分をただよわせている平野の道を歩きながら、道沿いの家のラジオの謡曲にからまれ、どこかでついている羽根の音につきさされ、晴着で自転車に乗つて走つてくる村人の晴れ晴れしさに心を冷々とさされながら、わたしは背中がジットリ汗ばむのを感じた。わたしは貧乏だ。年末があり、正月があるので尚更に貧乏だつた。その貧乏の中に、久坂の突然の死がとびこんで来て、わたしの貧乏を尚更にけわしくする。女房子供に一枚の晴着もおれは買つてやれなかつた。久坂と田村とで一寸酒をのんだクリスマス・イーヴ。だが、帰つてみれば上の娘の誕生日とを兼ねて祝うクリスマス・トリーは、わが家のは何とちつぽけだつたことだろう。

「どうして死んだりしたんでしようなあ。ああいう人は何も自殺せねばならんような事情はないでしように」と従弟は言つた。

「あんないい家庭の人が死ぬなんて贅沢だわ。食うや食わずの人達でも歯をくいしばつて生きてるのに」と女詩人は大股で和服の裾を蹴立てながら言つた。「久坂さんは死なねばならんようなことあつたの」

そうさなあ、とにかく、飛んだお元日だと、わたしは言いかけたが、黙つたまま歩きつづけた。

「……そりやあ、誰だつて死ぬ理由位もつてるよ、君」女詩人の亭主の若い小説家は言つた。

「バスでだと、何でもないが、歩けば遠いですなあ」と従弟は言つた。みんなうんざりした表情をしていた。

道は川の堤のあたりで少し登りとなり橋を渡つたところに交番がある。その交番が見えはじめたころ、道の上の小さな風呂敷づつみを若い小説家が見付けて指した。従弟は先に出てそれを拾つた。「わたしやこんなことに慣れていますから、わたしがお預りしましよう」と彼は変に勢いこんで言つた。「みなさん、良ろしいですな」憲兵語の尾がまだ彼の中に残つていた。彼は一瞬「そのすじの者」のように身を扱つた。交番は無人であつた。停留所の近くにもう一つ交番がある。そこへ向う道々、彼は興奮して、落し物の処理方法の法律について喋つた、が誰もうかつにしかそれを聞かなかつた。しかし久坂葉子の死を考えることから解放されるためには、うかつな聞き方にもせよ、元憲兵の説明に耳を貸している方が楽であつた。わたしはそのうちに何となく久坂葉子がどこかの飲屋であつたという刑事のことを、うるさく思い起しはじめていた。わたしは早くこの連中から自由になりたいと思つた。風呂敷包みを拾つたのが何が語るに足る事件なのだろう！

交番で風呂敷を開くと、それは神主が落したものだと判つた。いくつかの包み金と、しやくが入つていた。あちらで拝み、こちらで拝み、元日は神主にとつて坊主のお盆のようなものかも知れない。神主が商売道具を落したというのは、いつそ正月らしい事柄かも知れぬ。交番の巡査たちも正月らしくゆつたり構えていた。従弟はいかにも専門家らしく振舞い、以前その方面の者でしたからなどとまで言つた。巡査たちは気にとめたとも見えなかつた。外へ出ると従弟は尚も少し興奮していた。元憲兵のザンゲの気分は何時の間にか得意の気分に移つていたのだ。このようなこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com